

Title	現代日本語可能表現の意味と用法(Ⅰ)
Author(s)	小矢野, 哲夫
Citation	大阪外国語大学学報. 45 p.83-p.98
Issue Date	1979-02-19
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80753">https://hdl.handle.net/11094/80753</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 現代日本語可能表現の意味と用法(I)

小 矢 野 哲 夫

On the Meaning and Uses of Japanese Potential Expressions (I)

Tetsuo KOYANO

This paper tries to consider the lexical meanings of Japanese potential verbs in many kinds of uses such as present form, past form and modifier-head structure. Also we refer to the relation between a potential verb and a simple intransitive verb, and between a potential voice and a spontaneous voice. Then we can obtain three meanings of potential verbs: (i) ability, in tenseless uses, (ii) possibility of realization, in most present and past form, (iii) permission, in special present form. But these are surface meanings. The lexical meaning of them is basically something like a state-change.

0. 日本語の文法の説明の中で、可能の助動詞、可能動詞、可能相、可能態などの術語が用いられるが、「可能」とは一体どういう意味を指して使われるものなのであろうか。たとえば、可能の助動詞とは「れる」と「られる」とであるが、この形式はまた、受身や自発（自然可能とも）や尊敬の意味をも表わすのである。このため、山田孝雄（1922）はこの形式の意味の本質を「状態性の間接作用をあらはすもの」（p.105）と規定し、その意義作用が四様に現われるとしている。時枝誠記（1955）は、この四つの中から尊敬の意味を除外して、「可能・自然可能・受身は、一貫した表現法として取り扱うことが必要である。」（p.181）と述べている。また、「可能・自発の助動詞」として一つの項目を立てる解説書もある（松村明編1969、佐藤喜代治編1977）。次に、可能動詞についても、その意味の中に「自発」があると指摘されている。第三に、可能相や可能態についても捉え方が一様でない。たとえば、三矢重松（1908）は「動詞の性相」として被役相（いわゆる受身）・可能相・使役相・敬相の四つを認め、可能相の中に自然的可能相（いわゆる自発）を置き、さらに、「被役相そのまゝの文が又可能相にも成る」（p.178）と扱っている。松下大三郎（1930）は「動詞の相」としてヴォイス、テンス、アスペクトなどを論じているが、受身、可能、自発をそれぞれ人格的被动、可能的被动、自然動的被动として被动の下位分類と扱っている（p.352-363）。これに対して、金田一春彦（1957）は能動態、使役態、受動態、中相態、自然可能態、自然受動態をヴォイスと認め、可能態と敬讓態とは「意味の上から、ヴォイスとはかなり性格が

ちが」い、可能態は『「……シナケレバナラナイ」や『「……シテモヨイ」などという形と同じ種類のもので、その動作に関する外的な制約のちがいを表わす変化というべきものの一種である。』(p.241)と述べている。このように、「可能」というものはきわめて把握しにくい面をもっているのである。本稿は、このような難問を含む「可能」というものを、言語としての可能表現にもとづいて考察しようとするものである。

さて、「可能」といわれているものの中では、「動作の能力・権利・余裕・実現性などのあることを示す」(岩淵匡1972, p.153)とか「能力賦与」と「困難な事態の実現、許容」(森田良行1977, p.477-478)のような意味が指摘されている。しかし、このような意味は何を基準にして、どのレベルで規定されるのであろうか。語彙的な意味そのものとして認められたものであろうか、それとも個々の具体的な用法として名付けられたものであろうか。筆者の考えでは、答えは後者である。だとすれば、可能表現に属する述語構成要素の語彙的な意味は何であり、何によって抽象されうるものなのであろうか。あとの方の疑問に対しては鈴木重幸(1972)が答えてくれる。

「語い的な意味は、具体的には、文法的に使用されたすがたで、文の中にしか存在しない。われわれは、そこから語い的な意味を抽象しなければならないわけである。」(p.280)

## 1. 可能表現の形式

可能表現の形式にはさまざまなものがある。従来認められてきたものや、認めうるものを形態の上から列挙すると以下ようになる。本稿ではこれらの形態を考慮に入れて考察を進めていく。

I. いわゆる可能動詞を用いるもの。

II. 可能の助動詞「れる」「られる」を用いるもの。

III. 動詞「できる」を用いるもの。

a) 「コト名詞+が+できる」の形

1) ～、今後、計画的にハマグリの“種”をまき、潮干狩りもできる浜にする。(毎日、78.6.7)

2) 「学校の掃除が満足にできない生徒がいる」(朝日、78.6.22)

b) 「モノ名詞+が+できる」の形

3) 「～、どこに居ようと自分に合った音楽ができるかどうかが問題さ」(朝日・夕、78.5.8)

4) 五十枚、六十枚の小説は、チョコチョコと朝飯前では出来はしない。(『文体』Vol. 2, p.30, 飯島耕一「詩の『文体』」)

c) 「コト名詞+できる」の形

5) こうすると空間が利用できるし、室内を面白く演出できます。(朝日、78.6.6)

6) ～、たいへんお求め安い価格でお届けできる特別ご提供品です。(朝日、78.6.6 広告)

d) 「節+形式名詞「こと」+が+できる」の形

7) 「～、かれはフランスの友好的態度と支援を期待することができる。」(朝日・夕, 78.5.8)

8) ～、間接的に外貨繰りを好転させることができるのが大きなポイント。(読売, 78.6.16)

e) その他の形

9) ～、証人や他人の秘密や名誉にかかわる場合は非公開にできる、～。(朝日・夕, 78.5.8)

10) ～、彼女の〈病気〉に触れる結果になるのを惧れて、それは口に出来なかつた。(『文体』Vol.2, p.233, 高井有一「夜の音」)

11) ～、2倍の速さで見た・聞いたたりできるスピード再生、～。(朝日・夕, 78.6.6 広告)

IV. 「可能だ」「不可能だ」を用いるもの。

a) 「コト名詞+が+(不)可能だ」の形

12) いつ、どこでも、カメラ撮りが可能、～。(朝日・夕, 78.6.6 広告)

13) ～、およびその貯蔵の可能になった弥生的自然～。(『文体』Vol.2, p.116, 上田三四二「内なる自然」)

b) 「節+形式名詞「こと」+が+(不)可能だ」の形

14) いまのままで選挙を行うことはまず不可能だ。(毎日, 78.6.10)

V. 「動詞+得る」を用いるもの。

15) ～、生育が早く、大阪湾の西風にも耐えうる沖縄産のガジュマルを植え込む。(毎日, 78.6.6)

VI. 「動詞+かねる」(肯定形で)を用いるもの。

16) ～暑さにたまりかねた若者や家族で、～。(毎日, 78.6.19)

VII. 「コト名詞+が+ならない」を用いるもの。

17) 満員で身動きもならず、～。(『文体』Vol.2, p.196, 立松和平「ブリキの北回帰線」)

VIII. 「動詞+がたい」を用いるもの。

18) ～華僑引き取り交渉にも避けがたい。(朝日, 78.7.4)

IX. 「動詞+にくい」を用いるもの。

19) ～、足跡の主は渡来人としなければ説明がつきにくい。(朝日・夕, 78.7.3)

X. 「動詞+ようがない」

20) どんな手続きをとったのか、調査しようとしたが、当時の府関係者は退職したり、死亡したりで調べようがなかった。(朝日・夕, 78.7.4)

XI. 「見える」「聞こえる」「わかる」のある種の用法。

XII. 「うかる」「たすかる」「つとまる」「もうかる」などの用法(宮島達夫1972)。

これらの形式のうち、I—IIIがもっともしばしば議論の対象にされてきたものである。これら

を基本文型の形で示すならば次のようになる。(寺村秀夫1975, p.210の図式による。)この図式の $N_1$

$N_1 \left\{ \begin{array}{l} \text{に} \\ \text{には} \\ \text{は} \end{array} \right\} (N_2\text{が}) \text{ V-potential}$ <p>= <math>N_1</math>は (<math>N_2</math>を) VDict.formことができる。</p> <p><math>\longleftrightarrow N_1</math>が <math>N_2</math>を V</p>
---

には多くの場合[+有性]の名詞が使われることは言うまでもなく、また、「独立文で、 $N_1$ は「は、には、も、にも」などの助詞をとって、いつでも主題化される。」(寺村, 同p.211, 原文は英語)ということも実例によって裏付けることができるが、この他に「 $N_1 \sim$ 」の形式として次の下線部のものを付け加えておく。

- 21) 私にも中学の娘がいるが、もし、こんなことをされたら親として黙ってられない。(毎日, 78.6.10)
- 22) ～, 私としてもいささか抵抗感をおぼえずにはいられないのである。(『文体』Vol.2, p.43, 磯田光一「“言文不一致”考」)
- 23) ～, 書きたいことが作者にとって, 確実に把握できていないからなのである。(『新潮』78年7月号, p.144, 河野多恵子の文章)
- 24) 「～孫の代までの六人くらいはオレー人でも勧誘できそうな気分になってしまったんですワ。」(大阪新聞, 78.6.18)
- 25) “もう誰も俺たちを止められない”(朝日・夕, 78.6.6)
- 26) 「わたし, もう働きませんので, わたしたちの面倒を, お願いします」(『文体』Vol.2, p.268, 古井由吉「肌」)

また、先の図式の $N_2$ が助詞に「を」をとるか「が」をとるかを問題にする議論もあるが(McCawley 1973, Makino 1975-76),本稿では立ち入らない。

## 2. 可能動詞の意味と用法

この節では、(1)連体用法、(2)過去形の用法、(3)現在形の用法、(4)アスペクト形の用法、(5)その他の用法、(6)可能動詞と単純自・他動詞、(7)「見れる」のような言い方、(8)可能と自発、などを扱う。

### 2.1. 連体用法

ここでいう連体用法とは「節+名詞」の構造の「節」に可能動詞が用いられるもの(現在形肯定、同否定)を指す。この場合、節を修飾部、名詞を主要部と呼ぶなら、主要部は、修飾部の述語(可能動詞)のもとになっている動詞の格支配下に入りうる要素である(ただし、形式名詞が主要部になる場合は除く)。

- 27) 血は～, 花模様の夜具ににじみ, にじみきれない血が, 窪みをさがして流れた。(『文学界』77年4月号, p.38, 佐江衆一「夢の墓穴」)

28) しかも上下に動かせるチルトハンドル。(朝日, 78.6.6広告)

29) と思いながら, 何か抗がえない力で, 言われた通り, 水栓をひねり, 梯子をのぼる。

(『文体』Vol.3, p.53, 田久保英夫「早春の対話」)

それぞれの主要部は, 「血が(夜具に)にじみきる」, 「チルトハンドルを動かす」, 「力に抗がう」という表面的な形で動詞に支配されうるものである。このような, もとになる動詞にとって固有の格(表面的には助詞「が」「を」「に」で表示されるものが多い)に立つ名詞が主要部になる連体用法では, 可能動詞は, 過去形の場合を除くと, 肯定であれ否定であれ, 主要部の能力, 性能, 性質など, 時間的な観念とは無関係の状态的な意味を表わすのが普通である。ただし, 否定の場合には27)のように, 現在の一時的な状態を表わすとみられるものがある。しかし, 能力, 性能, 性質などの意味を厳密な基準にもとづいて抽象することは, なかなか容易ではない。

ところが, 固有の格以外の格に立つ名詞が主要部になる連体用法では, その名詞が可能動詞との間に結ぶ意味関係に特徴があることに気がつくのである。まず用例を列挙する。

30) 懲しめ, 戒めることで球児らに立ち直れる機会を与える。(朝日, 78.6.22)

31) ～, 性行為抜きで, 好みの男女の子どもを作れる時代が来るのではないか。(朝日, 78.7.16)

32) 不妊女性でも赤ちゃんが産める新しい技術の登場だが, ～。(朝日, 78.7.16)

33) いつでもいちばんラクな運転姿勢がとれる4ウェイコントロール。(毎日, 78.5.9広告)

34) ～の妻がA子さんと同じ農協に勤めていて, うわさを知れる立場にあったこと～。(毎日・夕, 78.7.21)

35) 世情はどうみても野球大会をやれる状況とはいいいかねた。(朝日, 78.6.22)

36) 「～, 自分のミッキー(順)だ, といえる感覚こそ本当のファンのものですよ」(毎日・夕, 78.6.28)

37) ～, 水の中にも生き残れる能力を身につけることを～。(朝日, 78.7.2)

38) 「なんとか授業についていける学力をつけてやりたい」(朝日, 78.6.22)

主要部の, 可能動詞に対する意味をみると, 時を表わす(30, 31), 手段を表わす(32, 33), 状況を表わす(34, 35), 内的な要因を表わす(36—38)ということになろうが, これらはすべて, 条件と結果という関係として捉えることができる。その条件は確定条件のこともあれば仮定条件のこともあるが, とにかく, ある条件のもとで, 可能動詞のもとになっている動詞の表わす動作が実現することを表わす, というのが, 30—38の主要部と修飾部の意味関係であると言えよう。

このように, 可能動詞の現在形連体用法には, 何が主要部になるか(何が修飾されるか)によって, (i)能力, 性能, 性質など, 超時間的な状態を表わすものと, (ii)条件に対する結果としての実現を表わすものとが区別されうることが示唆される。なお用例には, 過去形連体用法はごく少数しかみられなかったが, この場合には実現を表わすのが普通だと思われる。

## 2.2. 過去形の用法

可能動詞が過去形で用いられると、(i)「過去の特定の時間における可能性・能力の実現を表わす」(鈴木重幸1972, p. 279)のが普通である。時の表現と共に起している例を挙げておく。

39) しかし今度は「本居宣長」と「死の棘」を選んで、これで良かった、という自信と安心感とを味わえた。(『新潮』78年7月号, p.142, 遠藤周作の文章)

40) 弟が生まれる前「ママ、パパ……」と片言がいえたのに。(朝日, 78.8.6)

41) 「～。カンが的中したんで、九回の打席でも相手の攻めを読み切れたと思う」(朝日, 78.6.25)

42) ～「お母さんたちはみな、長い送迎の時間もなくなって初めて自分の時間を持てた、と喜んでいる」という。(朝日, 78.6.25)

この他に次のような用法もある。

#### (ii)反実仮想

43) 第一の死の後に、薬をもっと細かく刻んでやるか、薬の上に布を敷くかしてやれば、それで後の死は救えたのである。(川端康成「禽獣」)

44) もし、優勝の決定が前期終了間際まで延びていたら、当面の敵の近鉄戦が一試合、ロツテ戦が三試合残っていて、かなりの動員増が見込めたのだが……。 (朝日・夕, 78.7.4)

これらは実際上は「救えなかった」「見込めなかった」という反対の実現を含意しているものであるが、表面的に解釈すれば、反実仮想という条件のもとでの可能性の実現を表わすものである。

#### (iii)未来の特定の時点における可能性・能力の実現を表わす。

45) 一次試験で何点取れたかは自己採点でわかる。(毎日, 78.7.2)

この例は、現実の時間では一次試験がまだ行なわれていないが、将来行なわれたと仮定して、その将来の時点での実現を表わしている。

#### (iv)「過去における可能性・能力」(鈴木, 同上)

46) この男は猪口に二、三杯なら飲めたが、近藤にいたっては一滴も飲めなかった。(司馬遼太郎「胡蝶の夢」)

#### (v)「～たものではない」の形

47) 当世のプール、おとなでも泳ぎより、水遊びに興じる場所なのだから、すいていところでも3メートルと泳げたものではない。(毎日・夕, 78.7.13)

48) 「カップライスは冷たくなったら喰えたものじゃなくてよ」(井上ひさし「百年戦争」)

小松寿雄(1969)は「たべられるようなものはなににもない」や「見られたものではない」の例を「可能から出て『……価値がある』の意を加えることもある」(p.74)と指摘し、松下大三郎(1961)が「価値の被動」の一種として「二度と見られた顔ではない。(再び視るに堪へず)」の例を挙げている(p.167)が、いかがであろうか。話手の価値判断が含まれてはいるものの、何らかの意味での可能性の実現を表わしているとも考えられるのではなかろうか。

#### 2.3. 現在形の用法

可能動詞の現在形の用法は、その過去形の用法や連体用法に比べて捉えにくい側面をもっている。過去形の用法ではほとんどの場合が、基準となる時点において事柄が実現したことを表わすものであった。また、連体用法では、何が主要部になるかによって、その可能動詞が能力や性質を表わしたり、状況や手段などの条件によって実現することが表わされたりするのであった。ところが、現在形の用法では、能力や性質、状況や手段による実現などが、区別しにくい。鈴木重幸(1972)は「現在未来形では、現在における可能性・能力を表わすのがふつう」で、「また未来における、その可能性・能力の実現(可能性・能力という潜在的なものの顕在的なものへの転化)をも表わす」とし、前者の場合を「状態動詞の基本的な用法とみとめるか、動作動詞の潜在的な用法とみとめるか」(以上 p.278)という点に問題をしばっている。しかし、現在における可能性・能力の潜在と未来における可能性・能力の顕在とは、必ずしも対立的に捉えうるものではないと思われる。たとえば、「今日はいつもより酒がよく飲める」は現在における可能性・能力の顕在(実現)を表わしているとみられるし、「にわとりは空を飛べない」は、現在、未来にかかわらず、にわとり全体の性質を表わす超時間的な表現であろう。また、「このハトはけがをしているので、今は飛べない」なら、本来的には飛ぶ能力を持っているけれども、ある原因で現在一時的にその能力を実現できない状態にあることを表わしている。これらのことは、形容詞に客観的な属性を表わすものと主観的な情意を表わすもの(およびその両方を表わすもの)があって、前者が事物の性質(時間にかかわらない)を表わし、後者が人間の一時的な状態を表わすという現象に似ている。ただし、形容詞の場合はこれらが語彙的な意味として比較的きれいに区別できるのに対して、可能動詞の場合には同じ語形が両方の意味をもっていて、場面に応じて区別されるという点で異なっていると考えられる。

森田良行(1977)によると、「可能表現とは、動作・行為が主体の能力範囲内で、もしくは特別な状況下で(特別な手段や方法、道具、動機、情況などの前提において)実現することを表わす言い方であ」って、その実現に次の五つの段階が認められるという。すなわち、(1)「本来備わった能力から当然それが実現できる」、(2)「補助手段を借りることによって実現が可能となる」、(3)「習得した能力によってそれを行うことが可能である」、(4)「内的な条件として、心理的または肉体的にそれをなすことが可能である」、(5)「外的条件によって、自己の意志というよりも、周囲の情勢や規則などからそれが可能となる」(以上 p.478)このうち、(1)と(3)が能力や性質を表わすのに用いられ、(2)と(4)と(5)が一時的な実現を表わすのに用いられやすいが、もちろん(1)と(3)にも一時的な実現を表わす用法がある。したがって、一律に、実現することを表わすと規定してしまうことにも疑問が残る。

筆者の考えでは、可能動詞の現在形の用法は、超時間的な表現として用いられているか、時間的な表現(一時的または継続的)として用いられているかによって、第一に区別するのが適当である。つまり、この基準によって属性の表現とそうでないものとを区別するのである。属性の表現としては、経験者(可能動詞のもとになる動詞の表わす動作の動作者)に関する能力や性能



を表わすのが普通である。

49) 弟は二歳と七カ月だが、なんでも話せる。(朝日, 78.6.6)

50) 中学三年生で、男子が約八割、女子は六割が二十五メートル以上泳げるという統計もあるが、～。(朝日, 78.7.2)

51) ～, B52が同ミサイルを二十発しか積めないのに比べ、ジャンボ機は六十一八十発も積むことができる。(朝日・夕, 78.5.8)

これらが属性形容詞の現在形用法と類似しているからといって、可能動詞は状態動詞に属すると断定することはできない。動作動詞であっても、「この車はよく走る」「あの子はなんでも食べる」「この糸はよく切れる」など、現在形が性能や性質を表わしうるのである。また、可能動詞の現在形の表わす能力や性能は、必ずしも経験者に関するものであるとは限らず、その動作の対象や手段に関するものでも表わすことができるが、その場合には、その経験者が一般化されて表現されず、その対象や手段について述べられる形となる。たとえば次のような文がそうである。

52) のびがよいので、マッサージ用としてもお使いいただけます。(朝日, 78.6.6, 化粧品広告)

53) 3分間で美しくウールが水で洗えます (洗剤説明書)

しかし、能力とか性能とか性質といった意味は、語彙的な意味として規定されるものではなく、現在形の中の一つの用法上の、表面的な意味として認められるものである。

次に時間的な表現として用いられる場合について。これは、可能動詞のもとになる動詞によって表わされる動作が、一時的であれ継続的であれ、現在において実現している、または未来において実現することを表わすものである。その場合、その動作が実現するための条件(確定条件も仮定条件も)が文中に示されることが多いが、その条件が、森田によって指摘されている(2), (4), (5)の段階なのである。

54) 一時的にもせよ、清くんたちは神様, 仏様そして悪魔たちを抹殺してしまったから, もうこの方法は使えない。(井上ひさし「百年戦争」)

55) 本誌創刊号は四百頁に近い大冊なので, 未だ全部は読みきれないが, ～ (『文体』Vol. 2, p.10, 尾崎一雄の文章)

56) 私は、宣長といふユニークな個性のうちに入り込むには、彼の文章の精読以外に道はないし、この道を行けば必ず入り込めると信じた。(『新潮』78年7月号, p.141, 小林秀雄の文章)

57) こんな詩形式から解放されたら, おれはどんなにのびのびとすぐれた作品が書けるか分らないのに—— (『文体』Vol. 3, p.25, 木下順二「戯曲の文体」)

ところで、可能動詞が許可を表わすことがあるとも言われるが、それは語彙的な意味としてではなく、おもに現在形の用法の一つとして生じる意味であろう。しかし、その用法を形式的に客観的に規定することは非常にむずかしい。なぜならば、可能動詞の現在形用法が許可を表わすかどうかは、話手が、動作者に対して、その動作の実現を許すという意図で発話しているかどうかによって決まるものだからである。たしかに、この現在形用法の中には、許可を表わす「～して

もよい」や禁止を表わす「～してはいけない」のような意味に解釈できるものがあるけれども、<sup>(注1)</sup>  
このような意味は、能力とか実現といった意味と同じレベルで扱うことのできないものであろう。<sup>(注2)</sup>

#### 2.4. アスペクト形の用法

金田一（1957）は「書ける」や「見られる」は「全体が一種の状態動詞であり、状態であるから、これらは、『書ケテイル』『見ラレテイル』というようには用いられない。」（p.241）と述べ、井上和子（1976）も、可能形式素をもつ文が『～ている』と共起しないのは、可能形式素を取ることによって動詞が状態動詞になることを示している。（下巻 p.87）と述べているが、わずかながらアスペクト形式素が、可能動詞と思われるものについての例がある。

58) 最初の時は、まだ書きはじめたばかりで、やっと第二章が書けていただけでした。（『新潮』78年7月号、p.141、島尾敏雄の文章）

59) 「丸裸でいても他人に怪しまれることのないところに隠れている、か。ふん、簡単に解けちゃうな、そんなものは」（井上ひさし「百年戦争」）

60) 「月づきなら…」とお考えの奥さまへ。いつの間にか払えてしまう……のんびり企画（78.6.

#### 14 家具店折込広告）

このうち60)の例は「いつの間にか」という語句があるので、本人が知らないうちに自然に実現するという、いわゆる自発の意味が感じられるが、59)の例は「簡単に」という副詞句があるので、意図的に実現することができるの意味であろう。58)は、書き終わっていたことを客観的な態度で描写したものと考えられる。本人の意志が強く出されているかいないかに違いはあるものの、いずれも「実現する」という意味では共通点がみられることから、可能動詞は、アスペクト形式素と結びつく場合には、動作的な意味で用いられると言えるかもしれない。

#### 2.5. その他の用法

ここでは、いままで説明しなかったいくつかの用法に言及する。

。「可能動詞連用形＋そうだ」

61) それでも七月は、つぶぞろいのコンサートが楽しめそうだ。（朝日・夕、78.7.4）

62) あの体格からすると、彼は泳げそうなのに、かなづちだ。（作例）

61)は未来における可能性の実現を推量するもので、「雨が降りそうだ」「ランプが消えそうだ」などの動作動詞の用法と同じであり、62)は現在における能力を推量するもので、「彼の家は金がありそうだ」「彼は強そうだ」などの状態動詞や形容詞の用法と同じである。このことは、可能動詞に動作動詞としての意味の側面と状態動詞としての意味の側面とがあることを示すものである。

。「可能動詞（＋否定）＋て」

63) 「みんなに会えてうれしい。～」（毎日、78.6.7）

64) P T Aで広田さんに出会えて生きかえった。（毎日、78.6.22）

65) 「今年は毎頁に日附の入ったのしか買えなくて、失敗したわ、～」（川端康成「雪国」）

これらは「～て」の形（前件）が、後件の表わす感情を引き起こす原因を表わしている。これ

を「ので」を用いて言い換えると、「会えたので」「出会えたので」「買えなかったので」のように過去形で表わされることから、この例の「～て」は実現したことを表わすと言える。しかし、この形がいつでも過去における実現を表わすかと言えば、「私は、自分にピアノが弾けて、本当にいろんなところで助かっています」のような表現が可能だと思われるので、そうとも言えない。能力の存在している状態をも表わすことがありそうである。

・目的を表わす「ために」に接続する例。

- 66) 看護職員は保健医療の中で、看護サービスをより重要な問題として、役割を果たしてゆけるために国際的な検討としてその労働条件、教育問題、自らの訓練にとり組もうとしているのです。(朝日、78.6.10)

奥津敬一郎(1975)は「ため」が目的を表わす構文の制限の一つとして、「補文および主文の動詞は、有生の主語による意志的動作を表わすもの、[ + volitional ]という素性を持つものでなければならぬ」(p.10)ということを挙げている。可能動詞は、意志を表わす助動詞「よう」と結合しない(\*「さあ、みんなで泳げよう」)し、命令形の用法がない(\*「もっと早く歩けろ」)など、意志的動作を表わす動詞としての要件を欠いているのであるから、目的の「ため」とは結びつかないはずである。したがって、この例を誤用として片付けることはたやすい。しかし、このような例があるということは、可能動詞の意味素性の中に、そのもとになった動詞のもつ[ + volitional ]が残ることがあると判断できる一つの証拠となるのではなからうか。もっとも、可能動詞によって目的あるいは目標を表わすには、次のように、「よう(に)」を用いるのが普通である。

- 67) 「税務職員が退職後にその能力を生かせるようにこの制度が用意されたわけだが、～」  
(毎日・夕、78.6.30)

- 68) 「農家が米を安心して作っていけるように引き上げるべきだ」(読売、78.6.26)

・その他

- 69) モーツァルトの「狩」をさすがしくきけたあと、ドボルザークの「アメリカ」は申し分ない歌う美しさのうえに、前述の明暗のしっかりしたひびきがあったらと思われ、～。  
(毎日・夕、78.6.28)

- 70) 少人数制で話せるまでお助けします。(毎日、78.6.13 広告)

70)は、「まで」が到達点、目標を表わすことから、「話せる」は未来における実現を表わす。69)は、<sup>(注3)</sup>いささかなじまない表現ではあるが、「きけた」は過去における実現を表わしていると考えられる。

- 71) これが職業として成り立って行けるのは、わが国のオーディオ愛好者の側に、それを受け入れる体質があるからだろう。(朝日・夕、78.6.19)

可能動詞は五段活用動詞から派生されるが、自動詞であれ他動詞であれ、その動詞が表わすのは意志的動作であるのが原則である。しかし、この例では、もとになる文は「これが職業として成り立って行く」であって、\*「だれかがこれを職業として成り立って行く」ではないように、もとの動詞に動作者格が支配されていないにもかかわらず、可能動詞形が用いられているのであ

る。この用法は、単なる誤用としてではなく、可能表現の形式Ⅴの「得る」の用法に通じるものとして捉えることができる。すなわち、「得る」の補文の述語には意志的動作という制限がないので、「これが職業として成り立って行きうるのは」という形で成立するのである。

## 2.6. 可能動詞と単純自・他動詞

たとえば「割れる」という動詞には、割ることができるという可能の意味(可能動詞として)と、割った状態になるという、いわば自然発生の意味(単純自動詞として)とがある。しかし、これは正しい言い方ではない。意志的動作を表わす「割る」から派生された可能動詞「割れる」と、他動詞「割る」に対する自動詞「割れる」とが同じ語形を有しているのである。このような関係にある動詞はほかに、(i)「売れる、折れる、脱げる、裂ける、剥げる、とれる、ほどける、解ける、焼ける、知れる、切れる、釣れる、抜ける、掘れる、剥ける、破れる」などや、(ii)「引ける、ひらける、もめる」などがある。(i)のものが、「木が折れる」といった形で可能と自然発生両方の意味を表わしうのに対して、(ii)のものは、対応する他動詞の意味に違いがある点で両者は区別される。たとえば、「気をもむ」に対する「気かもめる」は自然発生の意味にしか解釈できないし、「肩をもむ」に対する「肩かもめる」は可能の意味だろう。さらに「今日の会議はもめた」とは言えるが、\*「今日の会議をもんだ」とは言えない。「すばらしい世界が開ける」と「会議が開ける」、「気が引ける」と「辞書が引ける」などにも同じことが言える。

しかし、この両者の意味は、それぞれの意味における文型の違いとして区別することができる。すなわち、可能動詞の場合は、「 $N_1$  {に、には、は} ( $N_2$ が) ——」の文型、単純自動詞の場合は「 $N$  {が、は} ——」の文型となる。<sup>(注4)</sup>可能動詞としての例をいくつか示そう。<sup>(注5)</sup>

- 72) ～、中間試験で十点前後しか点が取れなかった約四十人に、～(朝日、78.6.22)
- 73) ～の妻がA子さんと同じ農協に勤めていて、うわさを知れる立場にあったこと～(=34))
- 74) これで佐世保重工は旧債務の重荷から解放され、身軽な“新会社”としてスタートを切れる可能性が出てきたわけ。(毎日、78.6.7)
- 75) 「～。急に撤退だ、という時は軍事裁判なんか開けませんからね。～」(『文芸』77年4月号、p.72、三浦朱門「息子」)

もう一つ、可能動詞と他動詞とが同じ語形をもつものがある。たとえば、(i)「立てる、並べる、落着ける、続ける、進める、近づける、休める」などや、(ii)「飛ばせる、任せる、つなげる」などがそれである。(i)のものは、可能動詞であれば、そのもとになる動詞が「 $N_1$ が $N_2$ に——」(ただし「休む」は「 $N_1$ が $N_2$ を——」)の文型をとり、これがそのまま可能動詞の文型にもなるが、他動詞であれば「 $N_1$ が $N_2$ を ( $N_3$ に) ——」(「 $N_3$ に」は位置を表わす名詞句)の文型であるから区別できる。これに対して(ii)の場合は、他動詞としてこれらの語形とともに「飛ばす、任す、つなぐ」という語形をもっており、<sup>(注6)</sup>この形が、可能動詞のもとになる動詞と同じ形であるために、一見区別しにくい場合が生じうる。つまり、可能動詞の「飛ばせる」も他動詞の「飛ばせる」「飛ばす」も、「 $N_1$ が $N_2$ を ( $N_3$ に) ——」の文型をとることががあるのである。

- 76) 「男性かつらがどこまで自毛に近づけるか」(可能動詞. 毎日, 78.6.6 広告)
- 77) だから(注・中国の歴史を)ヨーロッパの歴史にムリに近づけようとするとう間違いが起きる。(他動詞. 毎日・夕, 78.7.22)
- 78) 今春卒業した二期生は一人も一級まで進めなかった。(可能動詞. 朝日, 78.6.22)
- 79) PL学園は決勝戦にコマを進めた。(他動詞, 作例)
- 80) この風ではグライダーは飛ばせないだろう。(可能動詞. 作例)
- 81) 鳩を飛ばせて進水式を祝った。(他動詞. テレビニュースより)
- 82) どのテープにもコード一本でつなげます。(可能動詞. 毎日・夕, 78.6.6 広告)
- 83) こんなにばらばらに切れてしまったのでは、もと通りにつなげるのはちょっと無理でしょう。(他動詞. 作例)

なお、宮島達夫(1972)が、「有情物の無意志動作をあらわ」し、「可能の意味をふくむことが形の上でははっきりしている」ものとして挙げている「うかる、たすかる、つとまる、もうかる」など(p.426)や、金田一春彦(1957)で「中相動詞」とされている「煮える、売れる、くずれる、きまる、授かる、教わる、あずかる」など(p.239-240)についてはあとで(第II部)可能態、自発態、中相態相互の関係として言及する。

## 2.7. 「見れる」のような言い方

「見る」の可能表現の形式としては、可能の助動詞「られる」を付けた「見られる」が標準的な言い方であるが、「見れる」という形が使われることがある。「来れる」「着れる」の例もある。

- 84) ～、仕事中はその両親が孫の面倒を見れる。(毎日, 78.7.12)
- 85) そうであったからこそ、今日まで「有事立法」なしでこれたのだと思います。(朝日, 78.8.25)
- 86) 「～とてもハデで着れる洋服ではなく、借金も返せない」(毎日, 78.7.28)
- 87) ～、薄手の涼しいものであれば夏にだって着れる、というわけです。(朝日, 78.8.9)

このよな形は他に「出れる、寝れる、居れる、下りれる、起きれる、受けれる、食べれる、逃げれる、浴びれる、寄せれる」などがあるという(神田寿美子1964, p.81)が、「まだ少数の動詞に限られており、「×教える」「×開けられない」などの形は、ほとんどの話者は認めていない」(寺村1975, p.210-211, 原文は英語)ような状況である。なぜこのような形が生じたのか知らないが、筆者の方言(鳥取県倉吉地方, 19歳まで生活)では一段活用はほとんど規則的に「見れる」「着れる」の型になることから、方言からの影響があるのではないかと考えられる。しかし、このような形が使われていることに対して、まちがいだというよりも、神田も認めているように、可能動詞として扱ってもよからう。<sup>(注7)</sup>

## 2.8. 可能と自発

可能動詞が自発の意味を表わすことがある。普通は「思える」とか「泣ける」のような一部の動詞について指摘されるが、松下大三郎(1930)は、自発を「被動」の一種と認めて「自然動的被<sup>(注8)</sup>

可能動詞が自発の意味を表わすことがある。普通は「思える」とか「泣ける」のような一部の動詞について指摘されるが、松下大三郎(1930)は、自発を「被動」の一種と認めて「自然動的被<sup>(注9)</sup>

動」と名づけているが、「口語では『れる』『られる』を用ゐた方は多く心的作用の自然に用ゐられるが、可能動詞形は「心的作用の動詞ばかりでなく一般の動詞に博く用ゐられる。」(p.362)として、「泣くまいとしても泣ける」「笑へてしやうがない」「云ふまいとしても云へて来る」「こんなことが書けてしまった」「急ぐまいとしても急げる」「止らうとしても歩ける」「殴つたのではない、殴れたのだ」「どうも酒が飲めて困る」の例を挙げている。そして、自発と可能の違いを「自然動は自己の意志の発露した動作でなくて能力の発露である。可能は唯能力の存することを云ふだけで其の動作の実現を云ふのではないが、自然動は実現を云ふのである。」(p.363)と説明している。ここで可能動詞における自発の意味は、語彙的な意味なのか、可能動詞の一つの用法上の意味なのかという疑問が生じる。たしかに、「思える」については、「思う」自体に動作者の意志といった意味が少ないことから、意志的動作の結果といった意味がくみとれない。しかし、「泣ける、笑える、書ける、急げる、歩ける、殴れる、飲める」などはいずれも可能動詞本来の意味と用法をもっているのである。したがって、語彙的な意味というよりも、用法上の一つの意味であると考えられる。その用法とは、動作者の意志とかかわりがいいことを示す表現が明示されている(松下の例で「～まいとしても」「～うとしても」「～てしようがない」とか、アスペクト形式素「～てくる」「～てしまう」「～ている」が付いているというようなものである。そして、意味は、過去形用法、現在形用法、アスペクト形式素との結合形などから、自然に動作が実現することを表わす。この「自然に」という意味が、普通の可能の意味と異なる点だと言えそうである。用例をいくつか挙げておく。

88) 新発足にケチをつけるのは本意ではないが,せっかくの好機を逸したと思えてならない。

(毎日, 78.7.5)

89) 今は、私は少々、これでは中島梓が姉なのに可哀想だと思えている。(毎日・夕, 78.7.10)

90) そこに人を誘う津和野の秘密があるのかも知れない。若い人が多いのもうなづけてくる。

(朝日, 78.8.28)

(1978.9.9, 未完)

### 〔注〕

引用に際して、旧漢字を新漢字に改めた。また、用例の出典で、「朝日」「毎日」「読売」は新聞で、「夕」は夕刊の略、日付の表わし方は、たとえば「78.6.22」は1978年6月22日のことである。

(注1) 用例の中では『休耕田は使えぬ』奈良県 つれない行政指導(毎日, 78.6.15見出し)の例がある。これは「学習田であろうが、レクリエーション用だろうが、とにかく国が割り当てた以上、休耕田で『稲』と名のつくものを一切、作ってはならん、～」(毎日, 78.6.22)という意味である。

(注2) 英語の‘CAN’の意味にABILITYとPERMISSIONとPOSSIBILITYの三つを認めている人もある(G. N. Leech 1971, Quirk & Greenbaum 1973)が、今井(1975)は『『可能性』『必然性』『推量』などを表わす法助動詞を『知的』助動詞とよび、(中略)『許可』『義務』『命令』を表わすものを『心的』助動詞とよぼう。また『…する能力がある』のcan, 『…するつもりである』のwillのようにどちらにも属さない第3の種類もある』(p.83)と述べ、それぞれの助動詞が異なる意味構造をもつと考えている。

(注3) 奥津(1974)は相対名詞「あと」がとる補足文の性質について、「動詞文を主とするが、(中略) 静止的な意味の動詞や形容詞も可能ではある。」(p.249)と述べている。したがって、可能動詞が「あと」の補足文の述語になることを、可能動詞の動作性の根拠とすることはできないようである。

(注4) ただし、「気がもめる」「気が引ける」のように心理状態を表わす場合は「私は気がもめる／引ける」のように経験者が表わされうる。

(注5) 単純自動詞としての用例については寺村(1975) pp. 221–224参照。可能動詞と単純自動詞との対応関係については森田(1977)の「売る」「きる」「とる」「割る」などの項参照。なお、鈴木丹士郎(1972, p.142), 井上(1976, 下巻p.83), 奥津(1967)参照。

(注6) 他動詞「飛ばせる」「任せる」「つなげる」などと「飛ばす」「任す」「つなぐ」などとは、現代語ではゆれている語形と捉えられる。吉川(1964)参照。

(注7) このような言い方がいつ頃から生じたのかわからないが、松下の『改撰標準日本文法』(昭和五年改訂版)での言及(p.361)が比較的古いのではなからうか。

(注8) 寺村(1975)は自発態(Spontaneous)を広く解釈し、「見える、煮える、聞こえる、一れる、一られる」および「五段活用動詞語幹+eru」の形で「Nが V-spontaneous ⇔ (Xが) Nを V」(N: Inanimate, V: transitive)の文型をとるものと規定している。(pp.216–220)

(注9) 自発の意味分類については藤井(1971b)参照。

#### 【参考文献】A B C順

藤井 正(1971a)「可能」, (1971b)「自発」; 松村明編(1971) p.124–125, p.301.

古田東朔(1971)「可能動詞」; 松村明編(1971) p.125.

今井邦彦(1975)『変形文法のはなし』大修館書店。

Inoue, Kazuko (1974) ‘Experiencer’, *Descriptive and Applied Linguistics, Bulletin of the ICU Summer Institute in Linguistics*. Vol. VII, pp.139–162.

井上和子(1976)『変形文法と日本語』上巻・下巻, 大修館書店。

岩淵 匡(1972)「受身・可能・自発・使役・尊敬の助動詞」, 鈴木一彦・林巨樹編(1972)『品詞別日本文法講座 8 助動詞II』明治書院。pp.134–166.

神田寿美子(1964)「見れる・出れる——可能表現の動き——」『口語文法講座 3 ゆれている文法』明治書院。pp.81–91.

- 金田一春彦 (1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15。金田一編 (1976)『日本語動詞のアスペクト』麦書房。pp. 5－26に収録。
- 金田一春彦 (1957)「時・態・相および法」『日本文法講座 1 総論』明治書院。pp. 223－245。
- 国立国語研究所 (1951)『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』(国立国語研究所報告 3) 秀英出版。
- 国立国語研究所 (1960)『話しことばの文型(I)―対話資料による研究―』(国立国語研究所報告 18) 秀英出版。
- 小松寿雄 (1969)「れる・られる―可能・自発〈現代語〉」, 松村明編 (1969) pp. 71－78。
- Leech, G. N. (1971) “Meaning and the English Verbs” Longman, London. 國廣哲彌訳注(1976)『意味と英語動詞』大修館書店。
- 牧野成一 (1973)「『分かる』『知る』と understand, know について」『英語教育』1973年 1 月増刊号, pp. 14－17。
- Makino, Seiichi (1975－76) ‘On the Nature of the Japanese Potential Constructions’, Papers in Japanese Linguistics, Vol. 4, pp. 97－124.
- 松下大三郎 (1930, 1974復刊)『改撰標準日本文法 (昭和五年改訂版)』勉誠社。初版は1928年。
- 松下大三郎 (1960)『標準日本口語法』白帝社。初版は1930年。
- 松村 明編 (1969)『古典語現代語 助詞助動詞詳説』学燈社。
- 松村 明編 (1971)『日本文法大辞典』明治書院。
- McCawley, James D. (1973) ‘Notes on Japanese Potential Clauses’, McCawley (1973) “Grammar and Meaning : papers on syntactic and semantic topics” Taishukan, Tokyo, pp. 355－368。
- 三矢重松 (1908, 1928<sup>4</sup>)『高等国文法 (増補改訂版)』明治書院。
- 宮島達夫 (1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告 43) 秀英出版。
- 森田良行 (1977)『基礎日本語―意味と使い方―』(角川小辞典 7) 角川書店。
- 奥津敬一郎 (1967)「自動化・他動化および両極化転形―自・他動詞の対応―」『国語学』70集, pp. 46－66。
- 奥津敬一郎 (1974)『生成日本文法論―名詞句の構造―』大修館書店。
- 奥津敬一郎 (1975)「形式副詞論序説―『タメ』を中心として―」『人文学報』(東京都立大学) 104号, pp. 1－17。
- Quirk, Randolph and Greenbaum, Sidney (1973) “A University Grammar of English” 池上嘉彦訳『現代英語文法―大学編―』紀伊國屋書店。
- 佐藤喜代治編 (1977)『国語学研究事典』明治書院。
- 鈴木重幸 (1972)『文法と文法指導』麦書房。
- 鈴木丹士郎 (1972)「動詞の問題点」; 鈴木一彦・林巨樹編 (1972)『品詞別日本文法講座 3 動詞』明治書院。pp. 134－180。



Teramura, Hideo (1975) “An Introduction to the Structure of Japanese— Workbook, Book 3 —”

三友社。

時枝誠記 (1955)「可能」; 国語学会編『国語学辞典』 pp.180－181.

山田孝雄 (1922, 1942<sup>12</sup>)『日本口語法講義』宝文館。

吉田金彦 (1971 a)「可能の助動詞」, (1971 b)「自発の助動詞」; 松村明編 (1971) pp.125－126,  
pp.301－302.

吉田金彦 (1977)「可能—自発の助動詞」; 佐藤喜代治編 (1977) pp.151－152.

吉川泰雄 (1964)「『つなぐ』と『つなげる』」『口語文法講座 3 ゆれている文法』明治書院。pp.  
61－70.